

ラオスのこども通信

54号
2012年4月発行
ラオスのこども
30周年

発行：(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども

- 子どもは未来をつかみたい。▶ p1
- はじめる・つながる・つくりだす [2011.12-2012.3]
ラオス発 ▶ p2 日本発 ▶ p3
- みんなでボランティア ▶ p4
- 「勉強会」報告 ▶ p4
- メコンのほとり「食」▶ p4



子どもは未来をつかみたい。

「ラオスの子どもに絵本を送る会」として1982年から日本の絵本をラオスに寄贈するなどの活動を始めた当会は、2012年に30周年を迎えました。

絵本から始まった

1975年にベトナム戦争が終結。激しい空爆を受けたラオスは新たな出発をするも、多くの難民が出るなど数々の困難を抱えています。山がちな国土で道路をはじめ社会基盤の整備は進まず、学校教育に必要な校舎・教員・教科書のいずれも不足。まちや村でも本はめったに見かけず、小学校で読み書きを学んでも、やがて文字を忘れてしまうといわれる状況でした。

日本に在住するラオス人と日本の友人たちは、国づくりの基本は教育であり、絵本は子どもを惹き付ける大きな力があるという思いから母親仲間を中心にバザーで、まずは日本の絵本を集め、ラオスに送りました。これが当会の始まりです。

必要なのはラオス語で書かれた本ですが、ラオスには子ども向けの本はほとんど存在しませんでした。そこで当会は90年代にはラオスで本作りに着手。作家は少なく、発掘・育成も必要でした。

また、図書館に本を入れて学校に届け、1年ほどして再訪すると、本は読まれないまま虫に食われていたということもありました。読書経験を持たない先生が多いため、読書指導ができる先生の育成が重要な課題と、当会は気づかされたのでした。

90年代半ばからは、子どもたちが音楽、絵画、身体表現などの活動ができる児童館型施設「子ども文化センター」の開設支援をしています。学校ではそうした学びの機会がなく、子どもたちは感性豊かに活動していききました。

担い手が育っていくために

当会は、子どもたちが自らの可能性を大きく伸ばせるための環境づくりを使命としています。そのためには担い手が育つことが不可欠です。時間がかかることですが、ラオスの様々な地域で少しずつ担い手は登場しています。

近年、ラオスは大きく変貌を遂げています。例えば、当会が出版した人気の絵本、『少女ヌアドーム』（ウティン・ブンヤボン作）の1993年の初版と2006年版を並べると、本の体裁にも主人公にも時代の変化が映し出されます。首都はバプルの様相を呈し、携帯電話やデジタルメディアは地方にも浸透しています。

一方、教育の状況は、校舎の整備は進むものの、小学校に入学するのは男女とも80%台（UNICEF 世界子供白書2006）、最終学年（5年生）まで学ばない子どもも少なくなく、中学校への進学は30%台です。また、当会が小学校を訪問して感じるのは高学年になっても本の読み方がたどたどしいこと。まだまだ課題があります。

現在、当会はラオスのスタッフによるラオス事務所運営の自立化を進めています。意欲は高く、能力を強化することで実現を目指しています。もう少し時間が必要です。

子どもたちの未来に向けて、ともに見つけ、解決を図っていきませんか。（共同代表 森 透）



簡素な印刷の1993年版（左）と改訂した2006年版

ラオス 発

小中高校1,100人が大集合、ブックフェスティバル

2月17～18日、「第8回子どもブックフェスティバル」がヴィエンチャンの子ども教育開発センター(CEC)で開催されました。教育局と当会による図書活動の祭典で、42校の児童生徒と先生、保護者をはじめ約1,100人が来場しました。

読み聞かせ、詩の朗読、絵などのコンテストには多くの子どもたちが参加して日頃の活動の成果を披露。さらに、劇、舞踊、マジックショーなど盛りだくさんの内容でした。

各校15人の子どもたちを連れてきて、と伝えたのに、郊外にあるナークワイ小学校からはなんと140人が参加しました。この学校はとても熱心に図書活動に取り組んでいて、前回のブックフェスティバルの読み聞かせコンテストでは賞を独り占め。今年も1と張り切って、子どもたちはトラップの荷台にぎゅうぎゅうになってやって来たのでした。

当会スタッフのスックバンサーは、多くのハックアーン(ヴィエンチャン内全44か所中38か所)が参加したことが今年のブックフェスティバルの良かった点、と振り返ります。読書推進活動に熱心に取り組む各校が一堂に会し、成果を発表する舞台を得、また他校の発表を観ることは、先生にも子どもたちにとっても刺激になり、今後の活動の励みになったことと思います。

2日間、たくさんハックアーン担当の先生が手伝いに来てくれ、遠くからは南部サワナケート県の教育局からも駆けつけてくれました。また、ヴィエンチャン内の印刷所、出版社、書店、NGO、個人が資金や絵本の寄付などの協力のお陰で、この行事を開催することができました。(報告:ラオス事務所 秋元凌)

ハックアーン:当会が開設する図書室の愛称。「愛読」の意味。ラオス全国で220か所に開設(2012年3月末現在)。



出し物を鑑賞する子どもたち



絵のコンテスト授賞式。
「好きな場所」に当会子ども
図書館を描いた男子の子(右)

地域の図書活動の知恵と情報センター、 「読書推進センター」

2011年10月、読書活動がより地域に根づいたものとなることをめざし、その拠点として「読書推進センター」を、ラオス北部ボーケーオ県バーウドム郡南部チャムバサク県バントン郡に設置しました。同センターは地方教育局などの既設の建物内に本を保管し、地域の学校の図書活動をサポートします。

担当するのは県や郡教育局の読書推進活動を担う職員です。すでに数回に渡って研修を受け、読み聞かせや図書室運営の他に授業で本を活用するノウハウを修得し、学校の図書活動を補佐できる人たちです。

センターのいちばんの役割は、学校図書室への本の提供です。図書室の本の貸出カードが貸出記録でいっぱいになったら新しい本と交換ができる、貸出しすればするほど学校が新しい本を入手できる仕組みを導入しました。ほとんどの本がカード3枚(貸出しが80回程度)につき1冊、他に図書室で使うのり、はさみなど交換できるものは100アイテムに上ります。また、よく読まれて修繕が繰り返された本は1冊でカード1枚相当としました。学校の先生たちはカードがたまるとセンターに持って行き、子どもたちに人気のある絵本や図書室運営に必要な文房具と交換します。

これまで、学校図書室は先生たちが本の紛失を恐れ、貸出しがらないという問題がありました。そこで、貸出カードやたくさん読まれて破れた本に価値を与え、本を活用する仕組みとしたのです。これによって先生たちの行動に変化が現れ、活動優良校として表彰を受けた学校もあります。(53号を参照下さい)。

読書推進センターは最初、2008年にヴィエンチャン県教育局に設置しましたが、十分に活用されませんでした。そこで新規開設にあたって、担当者により多くの権限を与え、やりがいを感じられるようセンターの機能を見直しました。新設校から図書への要請があったり、災害で図書を失ったり、図書活動研修を実施する際など、担当者の裁量で地域の様々な図書ニーズに柔軟に対応してセンターの本を提供できることとしました。開設地の選定は、地方教育局の自主性を尊重し、担いたい!と関心表明をした地域としました。ボーケーオ県バーウドム郡の担当者ワントンさんは、「図書活動の知恵と情報のセンターにしていきたい」と意気込みを見せています。(JICA草の根技術協力事業)



小学校の先生たちがカードと交換する本を選ぶ(チャムバサク県)

日本発

<出版プロジェクト>

●学校法人平山学園 清林館高等学校のご支援

ラオス語紙芝居『ふうせんがほしい』

作: ヤーナヴッティ・チャンタランシー

絵: セーンスリー・カッティヤサック

部数: 1,000 部

約 20 年前に出版されたラオス初の紙芝居が原作。人気が高く、新たに絵を描きおこした改訂版です。小中学校をはじめ約 320 か所に配付します。

清林館高等学校では「あなたの愛でラオスに笑顔を」というテーマで 2010 年の文化祭や街頭で寄付が集められ、学校図書室開設と紙芝居出版に支援をいただきました。

小さな子どもが参加できる紙芝居に

作者のヤーナヴッティさんは情報文化観光省に勤める職員です。1993 年に同省が日本のユネスコ・アジア文化センターの支援で実施した紙芝居作りワークショップに参加して『ふうせんがほしい』を作り、出版されました。

ヤーナヴッティさんの話。

——このお話は小学校入学前の子ども向けに作りました。「これが欲しい!」と思ったら手に入れるまで欲しい、欲しい、欲しい!とおねだりし続ける小さな子どもの気持ちを紙芝居に投影しました。そして、小さい子どもが参加できるように、「ふうせん、ふうせん」と合唱し、男の子のために風船を呼び寄せたり、「大きくなあれ、大きくなあれ!」と言って膨らませたり、「何色があるかな?」と訊ねる場面を作りました。



「ふうせんがほしい」



子どもたちの心をぐとつかんで

「ふうせんがほしい」をはじめ、演技手と聞き手の受け答えでおもしろ展開していく紙芝居は、ラオスの子どもたちの心をぐとつかみまします。口承文化が豊かなラオスでは大人も子どももおもしろが大好き。当会スタッフの演じる紙芝居に磁石のように引き寄せられる子どもたちを首都でも地方の学校でも見かけます。ラオス語が母語でない少数民族の子どもたちにとっても、絵と語りと対話で展開する紙芝居はラオス語を楽しく学べます。



新設された学校図書室で紙芝居に出会った子どもたち (アタプー県)

●キヤノン株式会社のご支援

絵本: 「サンシンサイ」

作: パンカム

部数: 1,050 冊

「サンシンサイ」は、2009 年に出版した「サンシンサイ」の続編です。王子が悪魔にとらえられた叔母を助けに行く民話をもとに作られた 5000 行におよぶ詩がこの 2 冊におさめられています。作者のパンカムはラオスの国民作家と称えられ、文学では初めて国の文化財に指定されました。



「サンシンサイ」

<大田区とラオスをつなぐ交流事業> ラオス語の絵本をつくって ラオスの子どもたちに届けよう!

2011 年 9 月～2012 年 3 月、東京・大田区の小中高校に講師を派遣、識字の大切さを考え、ラオス語絵本作りをしました。ラオス語の翻訳シートを日本の絵本に切って貼り、計 242 冊ができあがりました。(大田区地域力応援基金助成事業)

参加校: 田園調布高校 (3 年)、美原高校 (3 年)、大森第六中学校 (2 年)、清水窪小学校 (3、4 年)、石川台中学校 (1 年)、大森第二中学校 (3 年)

子どもたちの感想

活動の話を聞いて

ラオスの子どもたちが(ラオス)の子どもセンターで日本語の歌を歌っていてすごいと思った/海がないところだけど、川魚を食べるのにびっくりした。

絵本作りをして

保育士を目指している私にとってとても勉強になった。子どもと関わる職業なので、世界の子どもの状況も知っておかなければならないと思った/自分たちが小さい頃普通に読んでいた本が、自分たちの手で生まれ変わって、遠い国の小さい子どもたちに読んでもらえるって思うと嬉しい/読み聞かせをしてもらった「ぐりとぐら」のラオス語の発音がとてもきれいだった。



小学校での絵本作り。日本在住のノイさん(右)

<スタディツアー 2011>

チャンタソンと行く

“ヴァイエンチャン・シェンクアン・サムヌアの旅”

12 月 17 日～26 日、学校と織物の里を中心に訪問。鳥根県や愛知県からも参加があり、20 名のツアーとなりました。子どもたちとの交流では牛乳パックで作ったカエルが大活躍しました。

参加者の感想

河原におりると、女性たちが川で沐浴していたり、細い竹の橋があったり、のどかな風景でした/乙武さんの「五体不満足」を読んだで子どもを愛せるようになったお母さんに涙した。話せず、歩けず車いすの我が子は出来ない分だけ感性が豊かなのだと。



織物の里サムヌアで出会った女性たち

会計ボランティアの喜び

風間 美苗 さん (活動会員・会計担当)

私が会計に携わった1993年当時は「ラオスの子どもに絵本を送る会」という任意団体でした。東京事務所の手書きの帳簿と慣れない表計算ソフトを使っていたラオスの会計処理、それらをまとめて収支報告書を作るのに必死だったのを覚えています。できあがったと喜んで、目が覚め、ああー夢だった、まだできていないということがよくありました。



当時の支出は1,000万円程度。NPO法人化した2003年には5,500万円に。2010年には認定NPO法人になりましたが、支出は3,000万円規模に。プロジェクトの調整と社会経済の厳しさを反映した寄付・助成金などの減少によるものですが、会計処理に携わっているといふ数字の正確さのみに関心がついて、数字に表れる活動内容に目が向かないことがあり、反省点です。

現在はラオス事務所には専任の会計スタッフがいて、東京事務所にはラオスの会計データを日本の会計に訳し、翻訳するスタッフ、会計ソフトに入力するボランティア (ラオスデータの処理が大事で大変)、日々の収支を扱うスタッフがいて、私は東京の収支の人力をしています。

私はラオス語もできませんし、なかなかラオスにも行けないので、自分にできることで少しでもスタッフの方々の役に立てれば、それがラオスの子どもたちの役に立つことになるかと願って作業をしています。ですから数字ばかりですが楽しいものです。計算が合うと特うれしう。これから体力が続けば会計をやらせていただきたいと思います。

前53号みんなでボランティア文中「バカラン」の最寄り駅は相鉄線がみ野駅です。訂正しお詫言いたします。

「勉強会」報告

第11回「ラオスを知ろう 食べよう!」

(2月11日・ライフコミュニティ西馬込)

講師: スックアロームさん (留学生)

ラオスってどこ? どんな国? というところからラオスの文化、年間行事など動画を交えて紹介。おやつはラオス・スイーツ。ラオス語ミニミニ講座もあり、楽しいラオス入門編となりました。今後も留学生とのつながりを深め、勉強会を開催する予定です。



左手前がスックアロームさん

表紙の写真

大きく変化するラオス。その一つに道路事情があります。1990年代、地方のガタガタ道でマイクロバスの天井に頭をぶつけました。ぬかるみにはまって立ち往生し、何時間か経って工事用車間に牽引されて脱け出したこともありました。ラオスの教育の遅れは道路事情の悪さも一因かもしれません。同時に急激な開発、環境破壊を押し留めていたともいえます。今や道路の整備は進み、快適になりました。そして外国の資本などが開発を進めています。そのスピードに教育の普及が追いついていない。首をかしげずにはいられません。

特定非営利活動法人 ラオスのこどもの目的は、子どもたちが自らの力を伸ばし、人生を主体的に選択でき、公正で平和な地球社会づくりに貢献することです。教育が十分に普及していない地域のひとつラオスで活動し、ラオスと日本をはじめ子ども、人々の参加を通じて、だれもが成長の機会を得ることをめざします。

ラオスのこども通信 54号

2012年4月発行 編集人: 森 透

発行: Action with Lao Children / Deknolao

(認定) 特定非営利活動法人 ラオスのこども

〒143-0025 東京都大田区南馬込6-29-12 ミキハイツ303

TEL/FAX 03-3755-1603

e-mail: deknolao@yahoo.co.jp

http://deknolao.org

都営地下鉄浅草線 西馬込 南口下車 徒歩7分

郵便番号 00140-6-462494

これからの予定 2012年4月~12月

<活動ミーティング>

現地報告、国内イベントの打ち合わせ、会の運営の意見交換などを行います。

5/12、7/7、11/10

<事務所オープン日>

初めて会に関わる方、活動に参加してみたいという方に活動の紹介をし、発送作業やパソコン入力などを手伝ったいただく日です。

6/2、9/11、10/6、11/3、12/1

<勉強会>

6/9 留学生との対話、8/4 絵本カフェ日本語の絵本をラオス語絵本に)、10/13 ラオスの口承文学、12/8 ラオス(神奈川県)訪問

*各回とも内容は企画調整中です。日程とも変更になる場合があります。内容や会場とあわせ、詳細はホームページでお知らせします。みなさんの参加お待ちしております!

<ラオスのお正月 ビーマイ・パーティー>

4月22日(日)、30周年ビーマイ・パーティーを開催します。詳細は別紙をご覧ください。

メコンのほり食

ラオスのこどもオリジナルレシピ その③

4月はビーマイ(新年)。ラープでお祝い!

ラオスのお祝いには欠かせない料理がラープ(ひき肉の香辛菜え)。肉は豚、牛、鶏などを使います。今回は牛肉のレシピをご紹介します。ぜひご家庭でお試ください。

[作り方]

- ①もち米はきつね色になるまで煮、すりつぶす。
- ②牛肉はミディアムぐらいに焼き、細く2cmほどに切り、さらに小さく刻む。
- ③しょうが、ニンニク、玉ねぎはみじん切りにする。
- ④③の材料とナンプラー、レモン汁、粉唐辛子を混ぜ、①とワケギとシソの葉のみじん切りを加え、牛肉にかき混ぜる。
- ⑤皿に盛り、ミントの葉、コリアンダーを飾って、出来上がり。



[材料] 4人分

・牛肉(ステーキ用)	400 g	・コリアンダー	少々
・しょうが	2切れ	・ナンプラー	大さじ2
・ニンニク	2片	・レモン汁	大さじ3
・玉ねぎ(M)	1/2個	・粉唐辛子	お好み
・もち米	大さじ2	・サラダ油	適量
・ワケギ	1/2束		
・シソの葉*	10枚		
・ミントの葉	少々		

※ホムデン(赤いけしき)が入手できれば、玉ねぎに代え、玉ねぎの葉のみを小さく切ればシソの葉はなくても可。